



**JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1**

Tuesday 16 November 2004 (afternoon)  
Mardi 16 novembre 2004 (après-midi)  
Martes 16 de noviembre de 2004 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説を書きなさい。

1 (a)

おれは、このおれは、どこにいるのだ。……それから、ここはどこなのだ。それよりも  
 第一、このおれは誰なのだ。それをすっかり、おれは忘れた。  
 だが、待てよ。おれは覚えている。あの時だ。鴨が声を聞いたのだっけ。そうだ。詠  
 田の家を引き出されて、磐余の池に行った。堤の上には、遠巻きに人がいっぱい。あし  
 5 この菅原、その矮叢から、首が突き出ていた。皆が、大きな喚び声を、挙げていたっ  
 けな。あの声は残らず、おれをいとしがっている、半泣きの喚き声だったのだ。  
 それでもおれの心は、澄みきっていた。まるで、池の水だった。あれは、秋だったもの  
 な。はっきり聞いたのが、水の上に浮いている鴨鳥の声だった。今思うと——待てよ。  
 それは何だか一目惚れの女の嘆き声だった気がする。——おお、あれが耳面刀目だ。そ  
 10 の瞬間、肉体と一つに、おれの心は、急に締めあげられるような刹那を、通った気がし  
 た。にわかだ、染な広々とした世間に、出たような感じがきた。そうして、ほんの心は  
 らく、ふつとそう考えたきりで……、空も見ぬ、土も見ぬ、花や、木の色も消え去った  
 ——おれ自分すら、おれが何だか、ちっとも分からぬ世界のものになってしまったのだ。  
 ああ、その時きり、おれ自身、このおれを、忘れてしまったのだ。  
 15 足の蹠が、膝の脛が、腰のつがい、頸のつけ根が、髑髏が、ほんの羅が——と、段々  
 上ってくるひよめきのために轟いた。自然に、ほんの偶然強ばったままの膝が、折り屈め  
 られた。だが、依然として——常闇  
 おおそうだ。伊勢の国におられる貴い巫女——おれの姉御。あのお人が、おれを呼び活  
 けに来ている。  
 20 姉御。ここだ。でもおまえさまは、尊い御神に仕えている人だ。おれのからだに、触っ  
 てはならない。そこにいるのだ。じっとそこに、踏み止まっているのだ。——ああおれ  
 は、死んでいる。死んだ。殺されたのだ。——忘れていた。そうだ。ここは、おれの墓だ。  
 いけない。そこを開けては。塚の通り路の、扉をこじるのはおよし。……よせ。よさな  
 いか。姉の馬鹿。  
 25 なあんだ。誰も、来てはいなかったのだな。ああよかった。おれのからだを、天日に曝  
 されて、みるみる、腐るところだった。だが、おかしいぞ。こらつと——あれは昔だ。  
 あのこじあける音がするの、昔だ。姉御の声で、塚道の扉を叩きながら、言っていた  
 のも今のこと——だったと思うのだが。昔だ。  
 おれのここへ来て、間もないことだった。おれは知っていた。十月だったから、鴨が  
 30 鳴っていたのだ。その鴨みたいに、首を捻じちぎられて、何も分からぬものになったこ  
 とも。こらつと——姉御が、墓の戸で嘆き喚いて、歌をうたいあげられたっけ。「巖  
 の上に生ふる馬酔木を」と聞こえたので、ふと、冬が過ぎて、春も聞け初めたころだと  
 知った。おれの骸が、もう半分融け出した時分だった。そのあと、「たをらぬと……見

35 すぐき君がありと言はなくだ。そら言われたので、はつきりもう、死んだ人間になっ  
 だ、と感じたのだ。……その時、手で、今しるよりにきわめてみたら、驚いたことに、  
 おれのからだは、着こんだ着物の下で、腊ろうのように、べしべしになっていた。――  
 膺むねが動き出した。片手は、まっくらな空をさした。そうして、今一方は、そのまま、岩床  
 の上を掻き擾さわっている。

40 うつそみの人なる我や。明目めいもくよりは、二上山にじ上山を愛あい兄弟けいだいと思はむ  
 謀歌まうかが聞こえて来たのだ。姉御あねごがあきらめないで、も一つつき度して、歌ってくれたの  
 だ。それで知ったのは、おれの墓はかというものが、二上山の上にある、ということだ。  
 よい姉御だった。しかし、その歌の後で、またおれは、何もわからぬものになってしま  
 った。

45 それから、どれほどたったのかなあ。どうもよっぽど、長い間だった気がする。伊勢の  
 巫女みこ様、尊たかみい姉御あねごが来てくれたのは、昏睡こんすいりの夢を醒さまされた感じだった。それに比べ  
 ると、今度は深い睡りの後あとみたいな気がする。あの音がしてる。昔の音が――。  
 手にとるようだ。目に見るようだ。心を鎮めて――。鎮めて。でないと、この考えが、  
 また散らかつて行ってしまふ。おれの昔が、ありありと分かつてきた。だが待てよ。  
 ……それにしてもいつたい、ここにいるおれは、だれなのだ。だれの干せなのだ。だれの  
 50 未まなのだ。それをおれは、忘れてしまっているのだ。  
 両の膺むねは、頸くびの回り、胸の上、腰から膝をまさぐっている。そうしてまるで、生き物のす  
 るような、深い溜め息ためいきが洩れて出た。

55 大変だ。おれの着物は、もうすっかりくさっている。おれの襦じゆは、ほこりになって飛ん  
 でいった。どうしろ、と言うのだ。このおれは、着物もなしに、寝ているのだ。  
 55 筋すぢはしるよりに、彼の人のからだに、血の馳はけ回るに似たものが、過ぎた。臑うでを支えて、  
 上半身が闇の中に起き上がった。

60 おお寒い。おれを、どうしろとおつしやるのだ。尊たかみいおつかさま。おれが悪わるかったと言  
 りのなら、あやまります。着物をください。着物を――。おれのからだは、地べたに凍  
 りついてしまいます。

(折口信夫『死者の書』)

(注) 折口信夫(おりぐちしのぶ、1887～1953)。日本の古代研究に民俗学的方法を  
 取入れた歴史家。歌人としても知られる。『死者の書』は、学術研究では埋めきれない  
 未詳の部分を想像で補って、小説として書かれた。猶本抜粋は『高校生のための小説案  
 内』(1994、筑摩書屋)によった。

耳面みみもと刀自・耳面みみもと(みみもと)は婦人の名前。刀面やまもと(とじ)は貴婦人の尊称。

ひよぬき・ひくひくと動くこと。

伊勢の国におられる尊たかみい巫女・伊勢神宮の齋宮。天皇の姉妹や嫁だけにこの地位が与  
 えられた。

『巖石の上に..』及び「うつそみの..」は、いずれも万葉集に収められた大伯皇女の歌。

ほじし・干し肉

1 (b)

### 四千の日と夜

一篇の詩が生れるためには、  
われわれは殺さなければならぬ  
多くのものを殺さなければならぬ  
多くの愛するものを射殺し、暗殺し、毒殺するのだ

5 見よ、  
四千の日と夜の空から  
一羽の小鳥のふるえる舌がほしいばかりに、  
四千の夜の沈黙と四千の日の逆光線を  
われわれは射殺した

10 聴け、  
雨のふるあらゆる都市、鐘鐺、  
真夏の波止場と岸坑から  
たつたひとりの飢えた子供の涙がいるばかりに、  
四千の日の愛と四千の夜の憐みを

15 われわれは暗殺した

記憶せよ、  
われわれの眼に見えざるものを見、  
われわれの耳に聴えざるものを聴く  
一匹の野良犬の恐怖がほしいばかりに、  
20 四千の夜の想像力と四千の日のつめたい記憶を  
われわれは毒殺した

一篇の詩を生むためには、  
われわれはいとしいものを殺さなければならぬ  
これは死者を甦らせるただひとつの道であり、  
25 われわれはその道を行かなければならぬ

(田村隆一『四千の日と夜』、1956)

(注) 田村隆一(1923~2000)。詩人。『四千の日と夜』は、第一詩集。